

津毛城・桃井直常・黒牧彦など
— 富山国際大学周辺と歴史と伝説から —

About Tsuge Castle, Momonoi Tadatsune, Kuromakihiko and so on
— Some Topics on the History and Legends around Toyama University
of International Studies —

非常勤講師 堀田 裕史

HORITA Hiroshi

1. はじめに

財団法人日本交通公社は、当該財団法人の発行する「美しき日本」という単行本の中で、日本の観光資源約8,000件より、特A級（国際的）・A級（全国的）の観光資源で一度は訪れたい観光資源として391件紹介している。富山県関係では、①白馬三山、②黒部峡谷、③称名滝、④黒部ダムと黒部湖、⑤剣岳、⑥立山、⑦剣大滝、⑧弥陀ヶ原、⑨雲の平、⑩五色が原、⑪おわら風の盆と、計11含まれる¹⁾。富山県は全国レベルの観光資源に恵まれているといえよう。

一方、近年鎌倉街道のウォーキングなど、身近な観光資源が観光ないしはレクリエーションの対象として人気を得てきている。また古い時代の城や社寺めぐりを楽しむ人も増えてきている。即ち、国際的・全国的な観光資源の活用の重要性は無論であるが、その対極にある身近な観光資源を楽しむこともまた重要な時代となったといえよう。

身近な観光資源を楽しむ、またそれを人と分かち合うには、まず身近にはどのような歴史やその跡があるかをまず知ることが先決であり、またそれがなくては人と楽しみを共有することもできない。身近な観光ないしはレクリエーションの行動者自らが、対象とする地域を限定して、それについて知ることが前提となる。

その意味でまず手始めに、筆者にとり身近な富山国際大学のある富山市東黒牧とその近傍の小地域について、興味をそそりそうな歴史的な遺物や経緯、伝説などを調べたのでここに報告する。

2. 津毛城(つげじょう)

2.1. 津毛城の位置

所在地は富山市東福沢であり、熊野川の南側、富山市立福沢小学校の東側で、周りより約40～50m高い河岸段丘の上の台地で、富山平野を見下ろせる要衝の位置にあったとされる。

この地域一帯は昭和の終わりごろより大山サイエンス・パークとして開発された地域であり、河岸段丘の台地が東方向に続き、東約2kmには富山国際大学(富山市東黒牧65-1)がある。台地では、富山国際大学の敷地や体育館付近の道路等で東黒牧上野(うわの)遺跡(上野は、河岸段丘の上の台地を指す)が発見されるなど²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾、縄文時代の大規模な遺跡が見つかっている。

津毛城の位置は、福沢小学校から片山学園グラウンド(片山学園中学校・高等学校:富山市東黒牧10)あたりにかけての範囲とみられる²⁾⁶⁾⁷⁾。津毛城跡の地図上の位置は文献⁷⁾にもあるが、

文献 2) の「第 2 図 試作調査対象区と周辺の遺跡」の方が周辺との位置関係がわかりやすいので、その図の一部を以下の図 1 に示す。

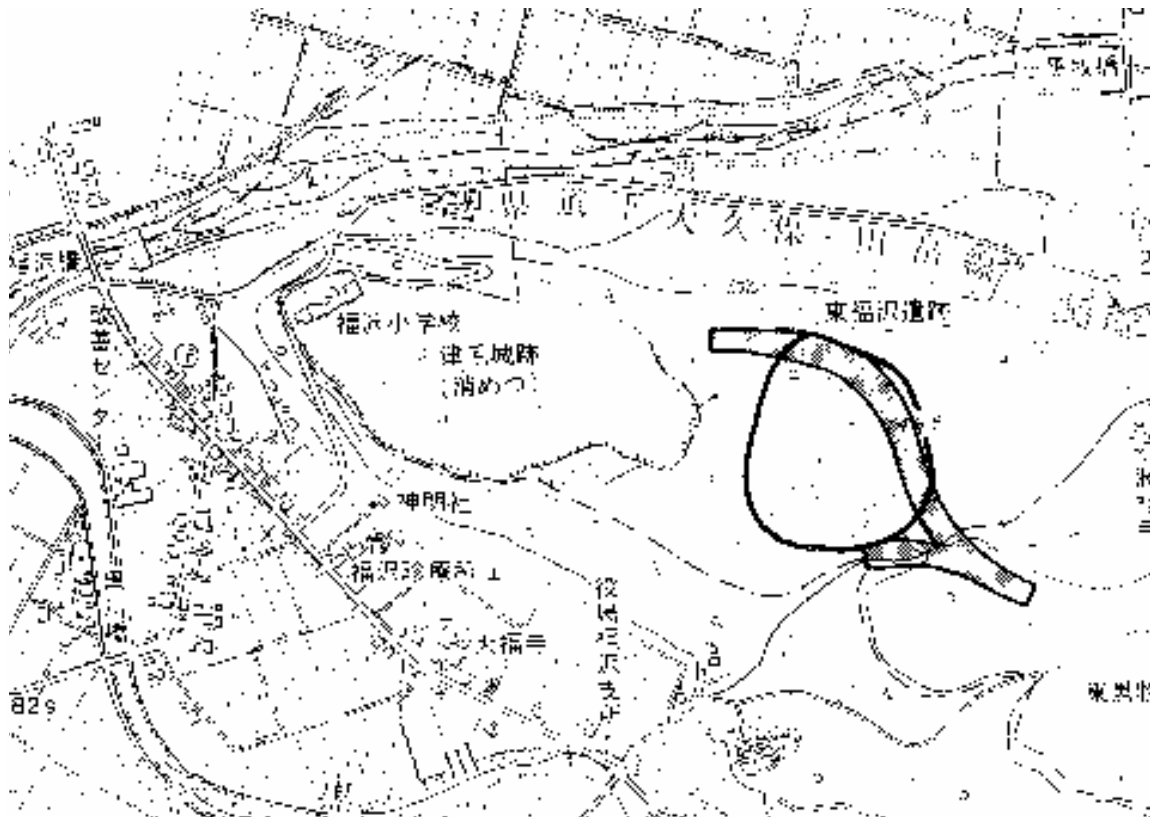


図 1. 津毛城跡位置 文献 2)による

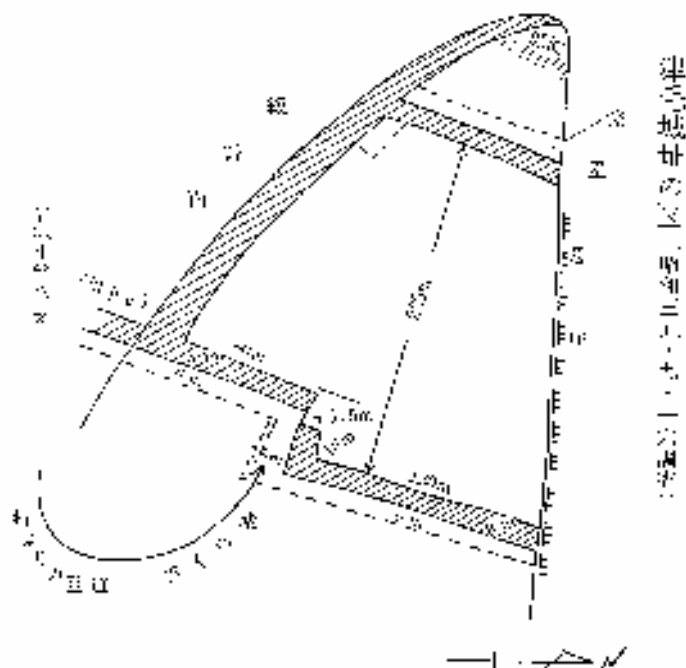


図 2. 津毛城跡 文献 6)による

図2には、文献6)による津毛城跡を示す。図で北側(右側)は熊野川が流れている。筆者の記憶では、片山学園中学高校敷地は元は山砂採取場であり、高さ10数メートルで平らに山砂採取をしていたのであり、現片山学園後方の一段高くなった台地が、以前は現在の片山学園敷地まで広がっていたように思う。文献6)には土塁がみられるとされるが、山砂採取が高さ10数メートルに及んだため、遺構はもはや全く残存しないかも知れない。なお文献7)には、津毛城について、海拔140m、比高(回りの低地と比べた高さ)50m、城跡の規模は、長径330m、短径190mと記されている。

津毛城跡の所在地は富山市東福沢とされるが、原則として富山国際大学口からほぼ南北に通る道の西側(富山市立福沢小学校側)は東福沢で、東側(片山学園側)は東黒牧である(ただし、熊野川沿いに民家を含む範囲だけ帯状に東福沢の行政区画が道の東側に伸びている)。津毛城跡の西側の領域は東福沢に含まれ、所在地が富山市東福沢とされるものと推測される。

2.2. 築城と大まかな経緯

越中守護の桃井直常(「もものいたつね」、ただし太平記関係の書物では「もものいなおつね」と表記される例もある。生年、没年とも不明)が、正平年間(しょうへいねんかん、1346~1369年)に築城したとされる。桃井直常は、布市城(富山市布市にあったとされる)に居城したとされるが、それと近い津毛城も桃井直常の拠点だったろうと思われる。

戦国時代には、飛騨の塩屋秋貞が居城した可能性があり、上杉の家臣村田修理亮ないしはその家臣が居城し、上熊野城(富山市上熊野)城主の二宮氏と戦ったりした。その後、織田勢の最初の越中進出に際して、上杉勢と織田勢の戦いの舞台となった。1578年(天正6年)に上杉方の河田長親・椎名小四郎が守備したが、織田軍が迫ると、彼らは今泉城(富山市今泉)へ退き、ここには神保長住が居城したという。

2.3. 津毛城の名前の由来

津毛城は、別名「黒牧城」、「黒牧壘」、「黒牧村古城」、「黒牧村古壘」、「附之城」、「桃ツケノ城」、「黒牧領之内つきの城」、ともいう⁸⁾。「つげじょう」は「つけの城」が変化したものといわれる。「つけの城」は、附城(つけじろ)のことであるが、本城の防御用に作られた城(出城)、または攻撃用に敵の城の近辺に作られた城(向城)という意味がある。一般性は不明だが、文献9)では、使用頻度は防御用の城という意味で使われることのほうが多いとしている。

「桃ツケノ城」という別名は、「桃」が桃井直常を指すとすれば、津毛城が桃井直常の居城であったとされる布市城(別名布市館ともいい、布市城址は、文献7)では不祥とし、文献9)では富山市布市にある興国寺の近くで富山地方鉄道上滝線の東側とされる)の防御用の出城であったと考えることもできよう。時代が下り上杉勢が榎木城と津毛城の両方を守備した頃には、津毛城は榎木城の守備のための出城と見なさう。

ただし、文献8)では「つけの城」の名は、後者の攻撃用の城に由来するとされる。これによると、加越能文庫(富山領等越中国古城併雑書記)に飛騨出身の武将塩屋秋貞が、榎木城(かしのきじょう)を攻撃するために築城したと伝えているというのである。津毛城の築城は桃井直常との伝承であり、塩屋秋貞は廃城の様になっていたのを攻撃用に再構築したということになる。

なお、津毛城の「津」という表記は、近くに熊野川の船着場があったこと想像させる。即ち飛騨から長棟街道を陸路運ばれた物資は、この近辺で船にのせ鮎川(いたちがわ)経由で富山へ運んだと考えられている。

2.4. 檜木城 (かしのきじょう)

文献 6)によると、元龜 2 年(1571)には檜木城(檜ノ木城と表記される例もある。別名、村田城、榎ヶ原檜ノ木要害ともいう)に上杉勢の村田修理亮が居城して、近くの津毛城を新築し、元龜 2 年(1571)3 月 2 日に村田弥三郎と安達清蔵らを配したとされる。この檜木城は、かなり大規模で堅固な城であり、熊野川支流の黒川のさらに支流、榎ヶ原川(くるみがはらがわ)の谷の奥標高 230 m に位置するとされる⁶⁾⁷⁾。津毛城から直線距離で南東約 4.2 km で(富山国際大学の南南東、直線距離で約 3.3 km)、富山平野から見ると津毛城の奥手にある。図 3 に、文献 6)による檜木城跡の鳥瞰図を示す。

元龜元年(1570)8 月の上杉輝虎(謙信)書状では、飛騨の三木良頼に檜木城の守備を要請しているので、檜木城の築城はその頃か、またはそれ以前ということになる¹⁰⁾。

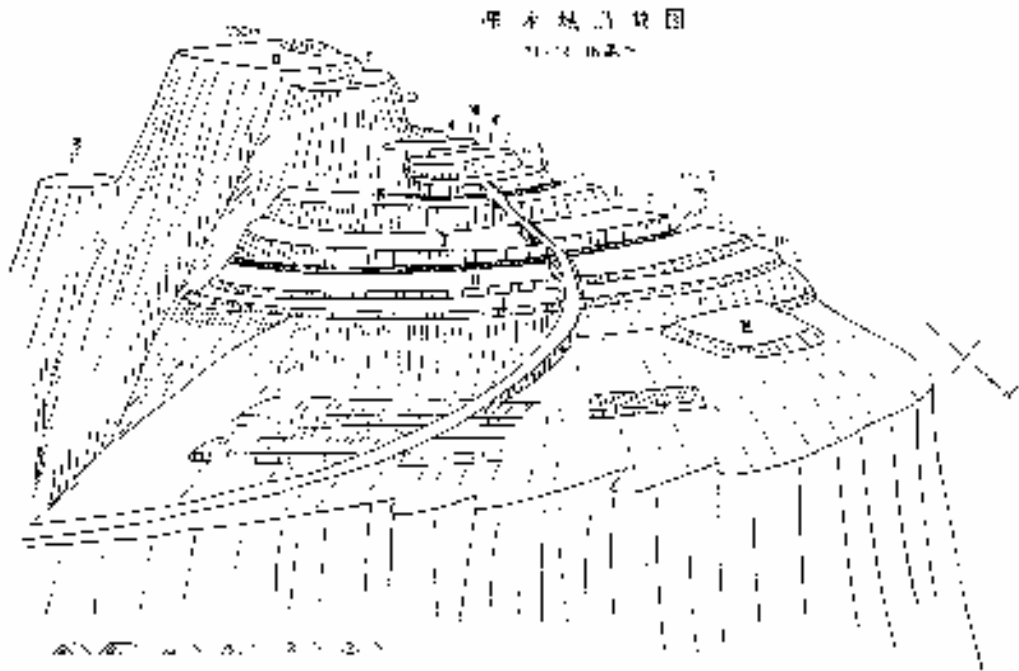


図 3. 檜木城跡 文献 6)による

なお、江戸時代に書かれた「肯構泉達録」(こうこうせんだつろく)(『肯構泉達録 「築城年表」』¹¹⁾)には、「元龜二、津毛城(又桃井居城、建武康歴の頃)・檜木、……」云々とあり、元龜 2 年に 2 城とも新築した可能性がある。

津毛城の新築とは、当時津毛城が廃城かそれに近い状態だったので、新築が必要だったのであろう。檜木城についても、城の縄張り内に上杉勢の武士が守備のため居住したと思われ、さらに堅固に構築しなおした可能性がありそうである。

なお、三州史(故墟考卷之二 津毛)¹²⁾では、津毛城と檜木城と一つの城の言換えとしている。このため三州史での津毛城の記述では、津毛城と檜木城のいずれを意味するか注意する必要があるとされる。

2.5. 津毛城・檜木城と街道

江戸時代、越中と飛騨の交通は、飛騨街道と呼ばれる神通川沿い(「下道」とも呼ばれた本街道)である。これは更に神通川左岸と右岸の道の2通りあった。飛騨(岐阜県内)に入ると高山まで越中街道と呼ばれた。)、長棟往来(ながとおうらい)と呼ばれる熊野川支流の黒川沿いの道(「上道(うわみち)」とも呼ばれた脇街道)、さらに有峰往来と呼ばれる有峰沿いの道(有峰道とも呼ばれた脇街道)があった。

この檜木城は長棟往来に近く、飛騨を警戒するために上杉謙信が作らせたと思われる。越中と飛騨の交通は、飛騨街道が整備される前は、長棟往来の方がより利用されていたといわれており、当時の要衝の地であったと思われる。

長棟往来は、福沢橋(古い方)から南へ続く道であるが、津毛城は、まさに長棟往来を見下ろす位置にあったのであり、まさに要衝の地にあったと思われる。

なお、長棟往来は、現在からは想像できないことだが、飛騨との交流には重要であったようだ。降雪時不通になるが、飛騨街道(本道)と違い通行料はほとんど課せられなかったこと、また鉱山が盛んな時代は(長棟鉛山「ながとなまりやま」の発見は江戸時代1626年(寛永3年)であり、檜木城の築城のかなり後である。長棟往来は、長棟鉱山道「ながとかなやまみち」とも呼ばれたようである)、物資輸送が盛んであったとされている。

また、津毛城は、常願寺川の扇状地の扇央部である上滝周辺に近い。有峰往来は富山平野への出口をこの常願寺川扇央部とするので、津毛城は、有峰往来からも近い位置といえる。有峰往来は、有峰道、宇連往来ともいう(宇連は、有峰の古い呼び名で「うれ」と読む。宇連村が有嶺村「うれむら」と転じ、元禄年間に加賀藩5代藩主前田綱紀が「憂い」に通じ陰気であり訓読みの「ありみね」にかえ有峰村としたという¹³⁾)。有峰往来は、飛騨の江馬氏が、有峰往来の途中にある中地山(なかつちやま)城や、小見城(小見は、亀谷往来の和田の和田川を向こう岸の地名)を築城するなど進出したりしており、江馬氏にとっては非常に重要だったらしい。津毛城は、この有峰往来を牽制する位置ともいえる。

なお、天正6年(1578)亀谷銀山(かめがいぎんざん)の発見後は、鉱山はたいそう賑やかであったと伝えられており¹⁴⁾、亀谷銀山への亀谷往来もにぎやかだったと思われる。有峰往来は、常願寺川沿いの経路が亀谷往来と共通している。

各街道の道筋は、「付録 1.長棟往来などの街道」に示す。

2.6. 塩屋秋貞と福沢城、津毛城

2.6.1. 塩屋秋貞と福沢城、津毛城

津毛城の近くには福沢城があったが、これは津毛城攻略のためにつくられた城と考えられている。富山国際大学の西北西、直線距離で約3km、富山市上今町にある。文献7)では富山市中布目交差点から道路沿いに南約600mの地点の西方約100m付近の丘陵先端を伝承地とし、文献9)

には、城址の全景写真があるが小規模なものである。

塩屋秋貞は、飛騨三木氏の有力家臣であったが、元龜元年(1570)8月の上杉輝虎(謙信)の三木良頼(みつぎよりよし)への榎木城守備要請の書状などからして、既に元龜年間には越中新川郡に展開していたとみられている¹⁰⁾。文献15)によると、飛騨の塩屋秋貞は、元龜2年(1571)に、猿倉城(富山市舟倉。現在は「風の城」といっており、風力発電が行われている)と梅尾城(別名戸川城、猿倉城の北2km。富山市船新)を築城し、岩木に砦を構築するなど越中進出に積極的であったが、塩屋秋貞は福沢城を攻略したとされる(なお三州志では、それ以前に塩屋秋貞が福沢城を築城したのを誰かに取られていたのだが、また取り返したのだとしている¹²⁾)。さらに、今泉城(富山市今泉、天正6年(1578)に上杉方の武将河田長親が取り返したといわれる)と津毛城を攻略したとされる。

さらに、『肯構泉達録 卷乃九 「白屋秋貞死亡の事」』¹¹⁾(白屋秋貞とは塩屋秋貞のこと)に、「津毛城より戸川城に移り」云々の記述があり、三州志(「故墟考卷之二」の「津毛」)¹²⁾に白屋(塩屋)秋貞が居城したと伝わる旨の記述があることから、この頃一時期、塩屋秋貞が津毛城に居城した可能性は、十分にあると思われる。

2.6.2. 塩屋秋貞と時代背景

塩屋秋貞が現れた時代背景を、わかる範囲で説明する。この節の年譜や歴史的資料は文献16)を基づくが、それ以外の場合「三州志」などと断つてある。

永禄2年(1559)6月、武田信玄は山県昌景に飛騨高原郷の江馬時盛(江馬氏の居城は、高原諏訪城(飛騨市神岡町殿))を攻めさせて降し、武田氏は越中への道、飛越ルートを確認する。

永禄6年(1563)2月、上杉謙信は塩屋城(飛騨市宮川町塩屋)に拠る三木(みつぎ)氏の家臣塩屋秋貞を降して飛騨半国を確認した。塩屋秋貞は、梅尾(富山市大沢野)に築砦して移住し、飛越ルートの監視にあたる。

永禄7年(1564)4月、山県昌景率いる武田軍は、飛騨と越中を攻め、江馬輝盛、塩屋秋貞を降し、江馬輝盛は弟円城寺を人質として出す(三州志¹²⁾)。同年7月、山県昌景、木曾氏に率いられた武田軍に、三木氏家臣が三仏寺城(さんぶつじじょう:城跡は高山市三福寺町井之上)を放火・撤退し、千光寺(現在地は岐阜県高山市丹生川町下保1553)が炎上するなどし、三木良頼は三仏寺領を江馬氏に渡して降参した。(永禄7年以後、三木良頼、塩屋秋貞とも武田方となり、上杉謙信とは疎遠で、永禄12年まで書簡も交わしていない)

永禄8年(1565)、山県昌景をはじめとする武田軍は飛騨の江馬輝盛を連れて越中を攻め、魚津の松倉城主椎名康胤を降した。椎名康胤は、以後上杉に離反し武田氏側と一向一揆側に付く。江馬氏は越中国新川郡中地山地方を武田信玄から預けられ、勢力が越中新川郡に及んだ(7万石という)。

永禄10年(1567)5月、武田信玄は飛騨から越中に入り巡視する。

永禄11、12年(1568、1569)、上杉謙信は親の代からの越中新川郡守護代であり、越中へ出陣を繰返し、背いた椎名康胤を松倉城などで執拗に攻めるなどし、河田長親を魚津城将にして上杉側の体制を整えた。

永禄12年(1569)、上杉謙信から三木良頼、塩屋秋貞へ、「音沙汰無いがどうだ」といった文言を

含む書状が届けられる。

元龜3年(1572)11月、三木良頼が没し、三木自綱が家督を継ぐ。

天正元年(1573)4月12日、武田信玄は、病のため死去。

天正元年(1573)三木自綱は織田方につき、織田信長の郡上の遠藤氏討伐に参加する。

天正元年(1573)、この頃までに、江馬輝盛は上杉謙信から中地山一帯(富山市旧大山町)を任されている。江馬氏の父時盛は武田方だが、子輝盛は武田と上杉の双方に通じていた。

天正元年(1573)9月、塩屋秋貞が上杉謙信に、鉛千斤、熊皮百枚、綿三百把を献上した。

天正4年(1576)、塩屋秋貞は、この年上杉謙信が飛驒の江馬時盛、三木自綱、内ヶ島氏理を攻撃し降伏させるのを手引きして助けた。この頃、上杉謙信から飛驒の「目代」として信頼を得ていた。

以上からは、塩屋秋貞は永禄6年一時上杉氏方につくが、永禄7年以後は三木良頼、塩屋秋貞とも武田氏方についており、天正年間、塩屋秋貞は上杉氏方に(上杉謙信死亡以前のことで、死亡後は織田方)、三木良頼は織田方についていたことになる。元龜元～3年(1570～1572)の間は、上杉謙信としては、越中での武田氏勢力の排除が進み、三木良頼、塩屋秋貞を自分の側に入れ越中支配を確固としたいのだが、本人達は依然武田側についていた状態であっただろう。

元龜元年(1570)8月の上杉謙信の三木良頼への書状であるが¹⁰⁾、1570年には既に神通川以東から武田勢力排除に成功しており(一部の一向一揆勢力を除く)、三木良頼とその家臣塩屋秋貞に、榎木城守備を要請したと思われる。要するに上杉謙信としては、榎木城・津毛城から新庄城以西を三木良頼・塩屋秋貞に(上杉謙信の村上源五郎宛書状に「三木良頼の居城を明け渡し新庄へ移ること」の記載がみられるが、富山市新庄を意味するものと仮定する)、そこより東から中地山方面は江馬輝盛に任せる意向だったと推察する。

しかるにこの頃塩屋秋貞は、武田信玄死亡前の時期であって武田方についており、上杉方につくつもりがなく、元龜2年(1571)に、猿倉城、梅尾城を築城し、岩木に砦を構築し、今泉城を攻略する。またその頃、福沢城、津毛城を攻略したようだ。塩屋秋貞は、猿倉城、梅尾城を築城して城生城を攻めたため、城生城側は上杉謙信に援軍を求めて上杉勢に反撃され、逃げることになる。

筆者の推測に過ぎないが、塩屋秋貞は飛驒街道からの飛越ルート確保を狙ったのではないか。江馬氏は中地山を確保済みであり有峰街道からの飛越ルート確保し、元々飛驒市神岡が拠点であり長棟往来もある程度確保していたと思われる。天正10年(1583)「飛驒の関ヶ原の戦」(八日町合戦ともいう。岐阜県高山市国府町八日町付近)といわれる戦いで、江馬輝盛が三木自綱を攻め逆に死亡して江馬氏滅亡へと続いたが、飛驒では三木氏と江馬氏の関係は悪いのであり、江馬氏の飛越ルート確保には、三木家臣である塩屋秋貞は危機感を持ったものと思う。塩屋秋貞にとっては、飛驒街道(越中内での街道の呼び名)からの飛越ルート確保は是非必要だったろう。飛驒には軍事以外にも、塩その他交易が重要であった。¹⁰⁾

筆者は、塩屋秋貞が勝手な行動を起こしたため、上杉謙信が長棟往来の要衝の榎木城、津毛城守備に、村田修理亮をあてたと想像している。さらに、それに反発して塩屋秋貞は、以前自分が築城して他者に取り立てられていたとされる福沢城を攻略して取り戻し、津毛城を攻めたものと想像している。

筆者は、これまでのところ、三州志の津毛城に塩屋秋貞が居城したらしいとの記述¹²⁾、肯構

泉達録の塩屋秋貞が津毛城より戸川城（梅尾城）に移ったとの記述¹¹⁾、加越能文庫の飛騨出身の武将塩屋秋貞が、榎木城を攻撃するために津毛城を築城したとの記述⁸⁾の、各記述を補強するような新たな史実は、発見できていない。

塩屋秋貞は、天正11年(1583)3月3日、城生城（富山市八尾町城生）の斎藤次郎右衛門（斎藤信和）を攻めたが、上杉景勝援軍到着により退却し途中西猪谷で死亡したとされる。その頃の塩屋秋貞は、天正6年（1578）の上杉謙信死亡後は織田勢に付いており、上杉勢の敵であった。

2.7. 二宮左衛門大夫の津毛城攻撃

2.7.1. 二宮左衛門大夫の津毛城攻撃

元龜2年（1571）8月1日に、上熊野城（城跡は、富山国際大学の西北西直線距離で約5km、富山市上熊野で悪王寺交差点の南1.5kmの浄蓮寺と隣接する神明社の辺り。土塁が残るといわれる）の二宮左衛門大夫が、上杉側の村田弥三郎・安達清蔵の拠る津毛城を攻めて敗れたことが、肯構泉達録に載っている（『肯構泉達録 卷乃七 「二宮、津毛城を攻むる事、並びに謙信、庄官百姓を欺き殺す事」¹¹⁾）。

さて、この戦いでは上杉勢は、榎木城から援軍を送って、はじめて勝利したとされる⁶⁾。その頃の津毛城の本城は榎木城、逆に津毛城は榎木城の防御の城という意味で「つけの城」といってよいであろう。

なお、二宮左衛門大夫は、当時は三木氏方であり、その後天正2年(1574)に上杉方に属し、上杉謙信の死後天正6年(1578)には織田勢の神保長住等の越中進攻の際には織田方に属するなど、帰属関係が一定していないという。また、上熊野城は上杉勢に焼かれ、二宮氏が跡地に浄蓮寺を建てたという。しかしながら、三州志では、二宮左衛門大夫は、当時は三木氏方ではなかったとしている¹²⁾。

2.7.2. 浄蓮寺・太平記・二宮兵庫助

現在の浄蓮寺敷地の案内板には、祐屋山縁起として、二宮祐源法師が甥の二宮兵庫助を弔うために14世紀に真言宗の祐屋坊として建立し、文明年間に浄土真宗の祐屋山浄蓮寺と寺号がかかわったと記載されている。二宮兵庫助とは、「太平記 卷第33 京軍（きょういくさ）の事」では桃井直常の身代わりとなって討たれたことが記されている人物である。京都での戦いのシーンで、夕暮れ時に桃井直常と偽って名乗りをあげ、血気盛んな敵方武将の細川相模守清氏が確かめもせず一騎打ちに応じ、を打ち取ったと誤解したという挿話で有名な人物である。筆者は、この案内板を見て、初めて太平記の当該シーンを思い出した。筆者が知らなかったと同様に、富山県民の多くは、太平記の登場人物二宮兵庫助を弔った寺があることを知らないのではないかと想像される。「付録4. 桃井直常の年表補足と太平記にみる役割」に記したように、二宮兵庫助の死亡は文和4年(1355)2月8日ではないかとみられるが、太平記の記述からは京都に入る前から桃井直常の身代わりになることを決めていたようであることなどを含め、戦いの挿話としては割と詳しく書かれており、太平記に名を止めた人物といえるであろう。

当該案内板には、上熊野城来歴として、二宮左衛門大夫が永禄年間上熊野城に居城し、元龜4年（天正元年）に上杉方についたが、天正6年織田に加担し、その後上杉勢の攻撃にあつて上熊

野城が焼失し、その跡地に浄蓮寺が移築されたとある。なお当該案内板では、元龜2年の津毛城攻撃については触れられていない。

2.8. 織田勢の進出と月岡野の戦い

織田勢との戦いでは、天正6年(1578)10月織田信長の嫡男織田信忠の家臣斎藤新五郎と神保長住が飛騨経由で越中に入った。天正6年3月13日の上杉謙信死去の機会をとらえて、越中と関係が深い神保氏子孫の神保長住を連れて行くことで越中平定を目論んだとみられる。

織田勢が近づくと、津毛城にいた上杉勢の河田長親・椎名小四郎は今泉城¹⁷⁾(現在の富山市の今泉病院付近とされる。富山市掛尾東交差点から北東へ320mの泉花寺角を左に90mにある日枝神社に碑があるという。富山国際大学の北北西、直線距離約9.6km)に撤退する。その後織田勢は、神保長住は津毛城に居城し、斎藤新五郎は上杉勢を追い今泉城に行き火を放ち、津毛城に戻ると見せかける。それを上杉勢が追ってきたので、起伏の多い月岡野で攻め、織田勢が大勝したとされる(月岡野は、慶安3年(1650)頃から本格的な開墾が始まるのであり¹⁴⁾、この当時は原野で起伏が多かったと推測される)。これは信長公記(しんちょうこうき)に記されており、「月岡野の戦」はわりと知られている。また、富山地方鉄道上滝線開発駅前には、戦死者のための祠があるという。

信長公記をもとにすると織田勢大勝となるのであるが、実際の戦果を疑問視する見方もある。その後の織田勢と上杉勢の力関係はわりと膠着状態が続き、織田勢の越中平定は佐々成政の進出(天正8年(1580)11月越中・守山城入城。天正9年(1581)2月越中国半分を任される。富山城入城。天正10年(1582)越中一國守護となる)まで待たなければならないからである。

なお、『肯構泉達録 卷乃八 「斎藤新五、所々の城を攻むる事」¹¹⁾』にも織田側の進出の記述がある。そこによると、越中侵攻の経路は、斎藤新五郎らは富山市榆原(旧猪谷村)からとされ神通川沿いであり、斎藤新五郎らに月岡野の戦いの後から加わった姉小路頼綱(あねがこうじよりつな)は飛騨から長棟越えで越中に入ったとされる。

2.9. 津毛城に関する信頼性が疑問なトピック

2.9.1. 上杉謙信自身が津毛城を攻略したという説

上杉謙信は、本人自身が軍勢を率いて越中を攻めることが度々あった。例えば、元龜2年には越中に侵攻し、十数の城を落とすとされる。「付録2. 上杉謙信自らの越中への出陣」に示す。

文献18)では、元龜元年(1570)5月に、上杉謙信本人が率いる上杉勢が津毛城を攻めたとしている。この戦いを裏付ける文献18)以外の資料は現在まで手に入っておらず、筆者は史実との確認ができていない。ただもし確認できれば、大層興味ある話と思われる。なお「付録2. 上杉謙信の越中への出陣」にあるように、元龜元年(1570)上杉謙信の越中出陣の記録はみつかっていない。

文献18)では上杉勢が攻めた当時、津毛城には、富山市八尾町城生の城生城(「じょうのじょう」と呼ばれるが、「じょうのうじょう」と表記する例もある。堅固な山城として知られ遺構が残っている)を居城とする斎藤氏の一族の斎藤帯刀(さいとうたてわき)がいた。難航不落で包囲したまま手をこまねいていたところ、付近の老婆(富山市大山布目在住とされる)が、城背後の湧水を城に流して飲料水とするための地中に埋められた樋(管)の位置を上杉勢に告げたため上杉勢は城

の水を断ち、形勢は一気に上杉勢に傾いた。城内では、水があるかのように見せかけようと、白米を馬の背や足などから流し落として白米で馬を洗ってみせたいが、上杉勢は小細工に惑わされず、一週間水を断たれた斉藤帯刀側を一気に攻め落とすとされる（近年でも付近の畑から城跡から焼けた白米が見つかったとされるが、真偽は不明である。仮に事実とすれば、山砂採取場になる前のことであろう）。

なお、城の中から白米を使って水があるかのように欺いたという伝説は、白米城伝説と呼ばれるが、上の話は、白米城伝説の典型的な筋書きとなっている。白米城伝説は全国に80余り伝わるといわれ、大別すると、敵が余力の残る城の攻略を放棄したので助かったという伝説と、何らかの理由で、例えばカラスが米をついばんだ等の理由で水がないのが露見して攻め落とされたとする伝説に大別されるといわれる。富山県内では守山城に、白米城伝説がみられる。

2.9.2. 上杉謙信の村の庄官への陰謀が津毛城であったとする説

他に、津毛城と上杉謙信に関係した伝承としては、『肯構泉達録 卷之7 「二宮、津毛城を攻むる事、並びに謙信、庄官百姓を欺き殺す事」¹¹⁾』の中で、天正6年(1578)、上杉謙信は津毛城に村の庄官(村の事務を執り行う人)を集め、一人ずつ奥に招いて力士に押さえつけさせて殺害したとある。これは、上杉謙信が天正5年12月に春日山城に戻り、翌天正6年3月には亡くなっているため、おそらく間違いであろう。また、三州志には¹²⁾、注記として、「人碑に元龜2年(1578)8月1日に上杉謙信が津毛城で新川郡の村の庄官を集めて殺したというのがあるが、その日は二宮右衛門が津毛城を攻めた日であり、矛盾する」といった内容の記載がある。二つの資料に見られる上杉謙信の村人に対する行状の日時が大きく違い、また誤りと思われるが、津毛城近辺では(村人が逃げたとされる富山市月岡や、登場人物の一人の村人が住んだとされる富山市布瀬辺りまで含めて)、上杉謙信の怖いイメージが伝承として残っていたことは、事実ということになる。

3. 桃井直常

3.1. 桃井直常の経歴

津毛城を築城したとされる桃井直常は、1333年の鎌倉幕府倒幕に参加、その後足利尊氏側につく。康永3(1344)越中守護となる。足利幕府が混乱した際(観応の掾乱:かんおうのじょうらん)には、将軍足利尊氏の実弟足利直義派(あしかがただよし)につき、畠山国清らとともに観応2年(1351)足利直義の実権掌握に貢献する。しかし翌年足利直義が失脚し急死すると、足利直冬らと南朝方につく。南朝方疲弊とともに桃井直常は孤立したが、足利尊氏と戦い続けたとされる。応安元年(1368)その頃桃井方が陣取ったとされる松倉城(富山市魚津市)で当時の越中守護斯波義将に敗れるなどの後、応安3年(1370)斯波義将らと長沢(富山市長沢)で戦い、子の桃井直和(ただかず)が敗死し、桃井直常は飛驒に逃れたとされる。翌応安4年(1371)飛驒国司姉小路家綱の援助を得て越中に侵攻したが五位荘で敗れたとされ、晩年は歴史から消えたとされる。

3.2. 太平記と桃井直常

太平記は1370年頃成立し、3部全40巻からなる。富山県関係で登場するのは、西暦1333年5月17日鎌倉幕府側の射水市放生津にいた名越時有(なごやときあり。「なごし」と記している例

もある)等名越一族の滅亡であり、その有り様が第1部巻第11に、平家物語の壇ノ浦の平家滅亡のシーンを彷彿させるかのような調子で描かれており、太平記の読者にはわりと知られている(『太平記 巻第十一 「越中の守護自害の事 付けたり怨霊の事」¹⁹⁾)。

その他に、富山県関係で登場するのは、桃井直常(弟の桃井直信・直弘を含む)である。ではこちらはどうか。桃井直常の場合は、幾つもの巻に登場するのである。表Iに登場する巻の番号と章段を記しておく。

表I. 太平記中、桃井直常(弟の直信・直弘含む)の記述がある巻と章段^{19) 20) 21) 22)}

巻	章 段
巻第19	奥州の国司顕家卿ならびに新田徳寿丸上洛の事 奥勢の跡を追うて道々合戦の事 青野原軍の事 付けたり囊沙背水の事
巻第21	塩冶判官讒死の事
巻第29	宮方京攻めの事 将軍上洛の事 付けたり阿保・秋山河原軍の事(※桃井四条河原の戦い) 将軍親子御退失の事 付けたり井原石窟の事
巻第30	将軍御兄弟和睦の事 付けたり天狗勢汰への事 高倉殿京都退去の事 付けたり殷の紂王の事 直義追罰の宣旨御使ひの事 付けたり鴨の社鳴動の事 薩埵山合戦の事
巻第31	南帝八幡御退失の事
巻第32	直冬上洛の事 付けたり鬼丸・鬼切の事 神南合戦の事
巻第33	京軍の事 (※二宮兵庫助が桃井直常の身代わりとなって討たれたこと) 八幡御託宣の事 三上皇芳野より御出での事
巻第37	南方の官軍都を落つる事
巻第38	諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事(※桃井直常不在時、大将が逃げたと勘違いして、桃井の軍勢が陣から逃げ出したこと)
巻第39	諸大名、道朝を讒する事 付けたり道誉大原野花の会の事

付録3には、「太平記中各章段に現れる桃井関係人名とその出現回数」が記述してある。付録3の表IVでは、桃井関係の人物の名を、各巻の章段毎に出現回数の一覧を示している。表IVからは、桃井直常の出現頻度には大きな差があり、多いものから以下の順である。

- ① 巻第19 青野原軍の事 付けたり囊沙背水の事
 - ② 巻第29 将軍上洛の事 付けたり阿保・秋山河原軍の事
 - ③ 巻第39 諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事
 - ④ 巻第33 京軍の事 ⑤ 巻第29 宮方京攻めの事 ⑥ 巻第30 薩埵山合戦の事
- ①②が特に多く、③以下の順で続く。

なお、桃井直常の太平記での記述には次のようなものが含まれる。延元3年(1338)2月28日

桃井直信・直常兄弟は700余りの兵で、北畠顕家勢数万の軍の奈良から京都への進軍を般若坂(奈良県北部奈良坂)で阻止するが、桃井兄弟の派遣を足利尊氏・足利直義に高師直が進言したとする。内容としては、「北畠顕家勢を破るには桃井兄弟に勝るものはいない。……。桃井が馳せ参じれば北畠側の陣を追い落とすことは思いのままにできるであろう。」といった内容である(『太平記 卷第十九 「青野原軍の事」』¹⁹⁾)。

天下が足利尊氏派と反尊氏派に分かれている中、一方の中枢におり、しかも圧倒的な信頼を得ていた武将であったことが明白といえ、驚くべき武将であったことがわかる。

3.3. 桃井直常の年表補足と太平記にみる役割

桃井直常の活動の年表は、文献6)などにある。付録4に、「桃井直常の年表補足と太平記にみる役割」として、「表I. 太平記中、桃井直常(弟の直信・直弘含む)の記述がある巻と章段」の章段を中心として、その時期と太平記に記された桃井直常の役割などを補足説明したものを示す。桃井直常の役割は、太平記に書かれたとおりに書いてある。時代背景がわかるよう、桃井関係以外のことも若干年表に含めてある。ただし「太平記 卷第38 諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事」については、越中国内での戦いであるので、付録4では越中に関する歴史資料から若干の検討を行っている。

なお文献6)では、桃井直常の居城としては、越中守護着任時は射水市放生津、その後布市城と津毛城を使用したと考えている。理由は、桃井直常の墓の伝承やゆかりの物が付近にいくつか見られること、活動の舞台として太田保から出発していることが多いと思われることなどを挙げている。ただし、その他に居城として、新川郡大家庄井ノ口説(富山県下新川郡朝日町、なお『朝日町史』に推定される井ノ口の由来が記されている)、井口城(富山県南砺波市)説があることも紹介している。

3.4. 桃井直常の最後

桃井直常の最後について、『肯構泉達録 卷乃四 「桃井播磨守直常の事」』¹¹⁾では、喚起泉達録(肯構泉達録の著者野崎雅明の祖父野崎伝助が書いた書物。これが散逸したため孫の野崎雅明が肯構泉達録を著したといわれる)には、康暦2年(1380)6月2日、津毛城を出て岩瀬城にこもるが、6月10日岩瀬城に火を放ち自害したと書いてあるとし、また、6月9日夜入水目的で海に出た男女は射水市放生津の者に助けられ、桃井直常の塚を放生津むかいの山に作り、直常の奥方は尼となって「柳の井」という所に住み、奥方死後は柳井院という寺ができました奥方の墓もあるという。

肯構泉達録では、太平記評判には、戦い(『太平記 卷第三十八 「諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事」』²²⁾の「付けたり越中の軍(いくさ)の事」で指摘された戦いのことと思われる)に負けた後、病死したと書いてあるとも記している。

文献23)では、三州奇談の上と同様の康暦2年(1380)6月死亡説も紹介されている。しかしながら、いろいろな説があるにせよ、桃井直常の最後については不明な点が多いとされている。

3.5. 桃井直常の菩提寺と墓

東薬寺（所在地は富山市牧野 32 で、福沢行きバスの福沢バス停留所の東 1 km 付近）の近くの農道わきに桃井直常の墓があるという。東薬寺は桃井直常の菩提寺であったという。なお東薬寺は、当時は所在地どおりの名で牧野寺と呼ばれていた。

また、桃井直常の菩提寺といわれる興国寺（富山市布市、富山国際大学行バス藤塚停の北西 200m 付近）には、永和 2 年(1376) 6 月 2 日の日付の位牌が安置され、桃井直常の墓「宝篋印塔」（別名桃井塚）が残る。

さらに、富山市開発の龍高寺（富山地方鉄道上滝線開発駅の東南東 100m）の旧地（富山市布市）にも寺の歴代住職の墓とともに桃井直常の墓があるといわれているし²³⁾、既に記したとおり射水市放生津にも墓があるといわれている。

このように桃井直常の菩提寺と墓の特定には不明な点が残ると考えざるを得ない²³⁾。

なお、康永 3 年(1344)越中守護職につく前のこととみられるが、横浜市港北区高田町の高田小学校東南 200m の天神社付近に居館があったとされる。ただし遺構はない。付近の興禅寺は、元応 2 年(1320)に桃井播磨守直常が再興したとのことで、寺もしくは寺近辺の「桃井直常の塚」を見るウォーキングが開催されているようである。横浜市港北区の「桃井直常の塚」であるが、次のような解釈はできないだろうか。即ち、太平記には、京都の「桃井直常の塚」の記述がみられるが、これは桃井直常の墓ではなく桃井直常の戦いの死者の塚と文脈からは思われる（『太平記 卷第十九 「青野原軍の事」』¹⁹⁾）。だとすれば、港北区の「桃井直常の塚」とは桃井直常自身の墓は指していないのではないかと思われる。（ただし年代的な疑問は残る。）

3.6. 桃井直常の認知度

なお、桃井直常の孫桃井直詮（もものいなおあき、幼名幸若丸）は幸若舞の創始者といわれ、福井県ではよく知られている。

では、津毛城の筑城者といわれる桃井直常はどうか。富山県関係では希少価値の太平記登場者で、しかもこれだけ登場するにもかかわらず、富山県民による認知度は低いようだ。

4. 黒牧彦

4.1. 別名「黒牧城」と地名「黒牧」

津毛城の別名として、黒牧城という呼び名もある。この黒牧は地名であるので、地名の由来について述べる。

なお地名としては、富山市東黒牧のごとく東黒牧しか現れない。事情はこうである。明治初期までは、熊野川北側と熊野川南側の現在の東黒牧も含めて黒牧村となっていた。それが明治初期に、熊野川北側を西黒牧村、南側を東黒牧村とした。その後様々な合併を経て東黒牧という地名は残り続けた。一方西黒牧の方は、幾多の合併を経ることで実質的には使われなくなり、現在では東黒牧のみ地名として残っていると思われる。

4.2. 「黒牧彦」と地名「黒牧村」

「黒牧」という地名は、古事記・日本書記に登場する崇神天皇（すじんてんのう）の時代の「黒

牧彦」に由来するといわれている。崇神天皇の時代であることから史実というより伝説である。また、古事記・日本書紀には第5巻に崇神天皇は登場するが、「黒牧彦」は登場していないので、ローカルな伝承と思われる。筆者は黒牧彦伝説を文献 18) で初めて知ったのだが、「黒牧彦」の記述は「肯構泉達録」にあるのでそれに沿って述べる¹¹⁾。

崇神天皇は4人の将軍を日本各地へ派遣し武力で統一を進めた天皇で、北陸へは天皇の伯父の大彦命(おおびこのみこと)を遣わした。大彦命は(富山市)八尾の伊豆部山に居を構えたとされる。大彦命は人の道を説き農業技術を伝授した。そのなかで黒牧彦は農耕に大変尽力し、ひとときわ技能も高いため、大彦命は、農業に尽力した功績を賞賛し、その住んでいた村を「黒牧村」と命名し、郷将(村に在住し農業を営む将軍)とし「早稲比子(はやねひこ)」の名を与えたとされる(文献13)、『肯構泉達録 卷乃一 「大彦命越中へ下向、ならびに保郷庄の事」』¹¹⁾。

黒牧彦は、黒牧にいた人と思われる(現在の富山市東黒牧。なお元は、明治22年4月以降富山県上新川郡福沢村、昭和30年1月以降富山県上新川郡大山町東黒牧、平成17年4月以降富山市)。その後、次々に黒牧彦のような人が現れることになる。室生彦の居住地を山室郷、豊生彦の居住地を三室郷と命名しそれぞれ郷将としたとか、その他、熊野郷、蜷川郷、山田郷、長沢郷など20余りの村が命名されたとされる。大彦命は、土地の人を感化し技術を伝授しつつ、優れた人を育てては部下として、次々に大和朝廷に組み入れていたと思われる。

黒牧彦は、そのような郷将の最初の人ということになる。即ち、黒牧彦は、最も早く農耕に精通した傑出した人物であったというのが、この伝説の意味するところである。

なお、黒牧彦は、角力取塚(別名、藤塚、富士塚、庚申塚、首塚。富山地方鉄道上滝線開発駅付近で、前方後円墳とされる)に葬られたといわれている¹⁸⁾。

4.3. 姉倉比賣命(あねくらひめのみこと)伝説

姉倉比賣を祭った神社姉倉比賣神社は、船倉山麓と富山市呉羽小竹にある。「肯構泉達録」には、姉倉比賣伝説も載っている。

富山市の船倉山(旧大沢野町)の神・姉倉比賣命は、能登の伊須流伎比古(いするぎひこ)と夫婦であったが、伊須流伎比古は、能登媛と契りを交わしてしまった。怒った姉倉比賣は、船倉山一体の石を投げ(4キロ四方にわたって現在でも石がなくなっているとされる)能登媛を攻めた。大乱となったため、大己貴命(おほあなむちのみこと)、「おほなむちのみこと」と呼ぶ例もある。大国主命(おおくにぬしのみこと)の別名。日本書紀では大己貴命または大己貴神、古事記では大穴牟遲(おほなむちの)神が多用されている。ただし大国主命には、古事記では計5つ、日本書紀では計7つの名がある。「おおなむち」または「おほなむち」は、立山三山の主峰大汝山の名前になったとされる)が出雲を出発して越の国へ赴き、乱を平定した。姉倉比賣は富山市呉羽小竹に流され、布を織って貢物とし、婦人に紡織を教え、罪を償った。(『肯構泉達録 卷乃一 「船倉神と能登神、闘争の事」』¹¹⁾)

比賣が機を織る時、蜷の宮の蜷が蝶となって群来した。蜷の宮(しじみのみや)の蜷の殻が、蝶になってきたのである。姉倉比賣が船倉山へ帰るのを許された時、比賣に従い、船倉の御手洗の蜷となった。夏になると、その蜷が蝶となって飛び回るといふ(『肯構泉達録 卷乃一 「大若子彦(おおわくのみこと)、阿彦(あひこ)を征伐する事」』¹¹⁾)。

後半の蜆の話であるが、富山市北代の白鬚神社境内（しらひげじんじゃ）には蜆ヶ森貝塚（しじみがもり）があり、その貝塚から多く蜆が出たし現在も残っている。蜆ヶ森貝塚の年代からは縄文海進の時期とされ、この辺りでも貝が取れたのであろう。この貝塚と姉倉比賣伝説が結びついたものと推測されている。

現在、姉倉比賣命を祀った姉倉比賣神社は二つある。富山市の寺家公園内の神社と（富山国際大学の南西方向、直線距離で約5.4kmの所で、富山市舟倉2360）と、富山市呉羽町（JR呉羽駅南約100mの古墳ともいわれる高台）にある神社である。927年（延長5年）成立といわれる延喜式に載っている神社である。

4.4. 黒牧彦伝説と姉倉比賣伝説

文献18)では、姉倉比賣命と黒牧彦伝説の接点を記述している。筆者は、姉倉比賣伝説は知っていたが黒牧彦伝説は知らず、両者の接点を考えたことはなかったが、ここでは筆者の考えの及ぶ範囲で接点を想像してみることにする。

ここでは、『肯構泉達録 卷乃一 「大若子彦、阿彦を征伐する事」¹¹⁾』に基づいて考慮してみる。阿彦征伐の伝説における黒牧彦の役割は、大己貴命が阿彦の乱暴を抑えるため、その使者として垂仁天皇の元へ行き、大若子彦を派遣してもらったことである。一方、阿彦征伐での姉倉比賣命の役割は、苦戦する大若子彦に、呉羽の地で、聖なる数人を意識し八つの幟を掲げて戦うことを伝授したことである。

富山市の大沢野と呉羽を基盤とする姉倉比賣命と、富山市黒牧を基盤とする黒牧彦は、直接会ったという記述はない。姉倉比賣命と黒牧彦とは、両者とも阿彦伝説に登場し、阿彦征伐へ貢献するという共通点があることだけである。

伝説からみた両者の接点は以上であるが、各伝説の持つ意味あいを考慮した両者の接点は、以下のようなものであろう。

姉倉比賣命は大乱を起こし、大己貴命が越中に来た。大己貴命は出雲の神であり、能登と越中を平定したことを象徴するのであろう。能登・越中の大乱を鎮定するのであり、技術力・軍事力は無論、能登・越中の神々とも協力したのであり交渉力にもたけていた。平定後は、その統治力や技術力が越中に伝わったとみるのが自然である。地元にも、農業技術にたけた人がでてきても当然である。

その後、崇神天皇の伯父の大彦命が越中に来て、黒牧彦は大彦命に大層賞賛されることになる。つまり出雲の農業技術が伝わりある程度下地ができていて、さらに大和朝廷の農業技術が伝わって、その後の越中の農業発展の基盤ができたということではないだろうか。黒牧彦の話は、洪水被害の少ない黒川・熊野川流域（熊野川もよく氾濫したと思われ、あくまで常願寺川や神通川と比較してのことである）、即ち黒牧辺りに優れた農耕技術を持つにいたった一族がいて大和朝廷に組み込まれていったこと、そしてその後越中各地にそのような一族が多く輩出したことを意味していると思われる。

姉倉比賣命が、期せずして越中の技術進化の種を蒔き、富山市黒牧周辺を端緒に次々にその成果が広がっていったというのが、各伝説の意味あいからみた接点ではないだろうか。

無論、伝説は伝説であり、当然のことながらそれ以上の議論はできないという前提にたった上

で、筆者の想像を述べたものである。

なお、阿彦伝説は、伝説の中でも荒唐無稽な空想上の産物として排斥される場合もあるが、ここでは、姉倉比賣命伝説と黒牧彦伝説の接点の検討のためとりあげたことを記しておく。

5. 富山国際大学近辺のその他の話題

5.1. 東黒牧上野（うわの）遺跡と大山竪穴住居跡展示館

5.1.1. 東黒牧上野遺跡概要

富山市東黒牧の約 40 万㎡の広大な範囲に、遺跡が広がっていると思われる²⁾。時代は、旧石器時代から、奈良・平安期にまたがっているが、主体は縄文期中期の遺跡とみられる。この遺跡は東黒牧上野遺跡と呼ばれる。遺跡の調査対象としては、東黒牧上野遺跡A地区～H地区の8地区に限定されている。

昭和 62・63 年に、A地区（国際大体育館・グランド近辺）・B地区（国際大本部棟・駐車場）・C地区（国際大1号館等北側から狭い方の職員駐車場にかけてとみられる）・D地区（国際大西側・インテック研修所）・G地区（国際大4号館・図書館棟と道路側空地）、H地区（インテック研修所向かいの駐車場付近とみられる）を中心に、試作調査が行われた。

その結果からは、遺跡の全体像が浮かんできたが、特にA地区が遺跡の集中地区であることがわかった。

5.1.2. 平成元年度発掘調査と富山県指定史跡

平成元年度に富山国際大学の東黒牧上野遺跡A地区のうちグランド予定地の東側で発掘調査が実施された。（竪穴）住居跡が15棟が発見され、この時点で未掘を含め29棟の住居跡が確認される³⁾。平成5年4月9日には富山県指定史跡となった。指定理由は、長軸8.2m短軸6.4mの楕円形で（床面の標高176.8m）テラスなど特異な構造を持つ大型の住居跡を含んでおり、また土偶など出土品から、当時の生活を知る貴重な資料となるということであろう。富山国際大学のグランド予定地であったが、設計変更により遺構は保存されたとされる。ここで言う保存とは、記録をとり、かつ現場を埋め戻すことにより保存したことを意味している。

5.1.3. 平成6年度発掘調査と大山竪穴住居跡展示館

東黒牧上野線の道路延長工事の実施のため、平成6年度に東黒牧上野遺跡A地区のうち道路予定地などで（富山国際大学体育館東端から東北方向ほぼ100mから200mにかけて現在の道路となっている部分）発掘調査が行われた⁴⁾。そこで6棟の竪穴式住居が発掘された。この時点で確認された住居跡は、計35棟となったはずである。地形上道路の設計変更は無理であるとして、保存はあらかじめ記録にとどめられたのみであるが、その内の保存状態のよい1棟の跡地が移設され、平成8年3月完成の大山竪穴住居跡展示館で常設展示されている（無料で、休館日は、日曜・祭日・年末年始）。場所は、富山市上滝572、富山市大山文化会館／富山市立大山図書館の西隣である。

5.1.4. 平成10・11年度発掘調査

富山国際大学の地域学部新設工事にあたって、平成10・11年度に発掘調査（東黒牧上野遺跡G地区と呼ばれる範囲のうち、特に、富山国際大学の講義棟I、4号館及び図書館棟予定地が対象）がされた⁵⁾。この調査では、土器は出たものの住居跡は発見されなかった。この後、G地区の一部では記録がとられた上で、建物が建設された。ただし、当該調査以前に確認済みの竪穴住居跡を含むG地区の他の部分は、そこを避けるよう設計変更がされ空地となっている。

富山国際大学の本部棟付近の道路北側に案内板があるが、その建物配置図で遺跡とあるのは、G地区で確認済みであった竪穴住居跡付近を指しているものと思われる。なお、もっとも大規模な竪穴住居跡の見つかった東黒牧上野遺跡A地区の関係の記載がないのは、気になるところではある。

5.2. 大川寺と江馬氏

富山国際大学の東北東、直線距離で約2.9kmに、大川寺（富山市大山上野603）がある。この近辺には、昭和36年に開園した大川寺(だいせんじ)遊園があった。富山地方鉄道上滝線に大川寺遊園駅（現在の大川寺駅）が設置されており、富山市内からアクセスがよく、家族連れで賑わっていたこともある。モータリゼーション・レジャー多様化の進行とともに集客力が減少し、平成8年閉園した。この大川寺遊園地の名称のもとになったのが、大川寺である。

文献6)によると、永享年間(1429～1440)、月江応雲により上滝で開山されたらしい。大川寺の過去帳では、江馬氏初代の江馬輝経が始祖であり、明徳年間(1390～1393)に中地山城主となった川上氏が帰依し伽藍を再興したとされる。これは誤りであり、江間輝盛から中地山城の城代を任された人物は川上中務丞であるが、天正年間の頃のことと時代が違いすぎるとされる。また別に寺の言伝えでは、天文5年(1536)焼失し、天文6年(1537)川上中務丞が再建したという。更に中地山城陥落とともに、元の上滝近辺に近隣百姓から借地して戻るが、元和元年(1615)借地の寄進を受けた(現存資料あり)とされる。

文献6)では以上のような記載がされるが、おそらく、①月江応雲が上滝近辺で開山、②伽藍焼失で江馬氏かその家臣川上中務丞が他の場所で再興し、③天正6年(1578)越中国人攻撃による中地山城陥落で庇護者を失い、上滝近辺に戻ったということであろうと推測する。

江馬氏は、埼玉県川越から承久3年(1221)岐阜県飛騨市神岡町殿に初代江馬輝経が移住し、滅亡の天正10年(1583)まで約360年神岡を中心に存続した。永禄8年(1565)江馬氏第16代江馬輝盛は新川郡中地山地方を武田信玄から預けられ、天正元年(1573)までには上杉謙信から中地山城を任されていた。天正6年(1578)の江馬氏の中地山城陥落まで、約23年間、中地山地方の支配者であった。この間、江馬氏は新川郡7万石を任されたとするのはオーバーにしても、常願寺川流域に影響力を及ぼしたと思われる。大川寺は江馬氏とその家臣川上中務丞の強い影響下にあったのであろう。それ故、大川寺の成立時期の言伝えに江馬氏が登場するのだろう。

なお文献6)では、高岡川上家系図（中地山城陥落で戦死した川上伊豆守忠輔の子式部乃丞が始祖）では、大川寺は江間輝盛の長男川上忠勝が、輝盛の次男川上俊国の菩提所として法川寺を建てたが、娘の病氣快復を祈願して移設し上滝のかたわらにあることから貞和元年(1345)滝脇山大川寺と改名したとあると紹介している。家系図の記述は誤りであり、例えば、江馬輝盛は天正10年

(1583) 八日町合戦で死亡しており 200 年以上年代が合わないし、江馬輝盛の遺子は江馬時政で、江馬氏滅亡後も存命だったが天正 13 年 (1585) 金森長近に反逆し敗退、自害している。

ところで、平成 19 年 10 月 28 日に、飛騨市神岡町殿に「史跡江馬氏館跡公園」がオープンした。昭和 55 年国指定史跡になった江馬氏の武家館跡に、建物や門が復元されている。

5.3. 上野彦次郎・火牛の計・文殊寺城

肯構泉達録では、上野彦次郎（上野彦次郎勝重、または上野勝重と記されることがある）が、牛に火のついた松明を付けて、夜戦で上杉謙信に大勝したとしている（『肯構泉達録 卷乃七 「上野彦次郎、火牛を以て謙信を攻め撃つ事」¹¹⁾）。元龜 3 年(1572)、夜、富山市馬瀬口付近で常願寺川をわたり上野（うわの）の方（富山市大山上野方面と思われる）へ進んできた上杉謙信勢を、上野彦次郎が仲間とともに、農民から集めた牛に火のついた松明を付けて放ち、上杉謙信勢は命からがら常願寺川を再度渡って戻り、滑川方面にその夜のうちに退散したというのである。これが事実であれば、上杉謙信を敗退させた顕著なエピソードということになる。

文献 6) では、上野彦次郎が上杉謙信と戦ったとすると時期的に合致しないと、そうではなく永正 13 年(1516)に、長尾為景が太田保（富山市南部の平野部）に侵入した際、上野彦次郎は、太田保の住民とともに文殊寺の奥（南側）の山にたてこもり、長尾為景を撃退したとしている。文献 6) では、この戦いで火牛の計が用いられたとも記していない。戦いあったとされる所は文殊寺城（文殊寺砦、西小俣城ともいい、富山国際大学の南東、直線距離で約 3.8 km の所で、富山市西小俣の西方の後背地の山の稜線に位置する⁷⁾）であり、文献 6) には縄張りも掲載されている。

5.4. 壇の山（だんのやま）

富山国際大学の北方、直線距離では 2.8 km、富山市月岡の焼野交差点の東北東約 400m には、周りより高くなった丘があり、壇の山といわれる。ここで壇の山遺跡と呼ばれる遺跡が発見された。ここにある壇山神社（だんざんじんじゃ）は、月賣社が合祀されている。伝説では、壇の山は、越中を目指して来た大彦命が夜、道に迷い一夜を明かした所とされている。

この丘陵の成立理由であるが、文献 24) では、地質が砂礫層であることから、常願寺川の度重なる氾濫で周りが侵食をうけたにかかわらずここは侵食を免れ、結果として周りよりやや高い丘となったものとしている。

築山（つきやま）が訛って月岡という地名ができたと思われ、月岡の地名の元になったとみられているが、実際は、人工的に作られた丘や山あるいは古墳とかといったものではなく、侵食されずに残ったということのようである。

5.5. 富山国際大学周辺の地質

常願寺川の扇状地から上流にかけては、河岸段丘が発達している。

文献 24) では、河岸段丘は、50～15 万年前に形成された高位段丘面、15～5 万年前に形成された中位段丘面、2 万年前に形成された低位段丘面に区分される。常願寺川流域での河岸段丘の例を、文献 24) からの例示を表 II に示す。低位段丘面、中位段丘面は更に細分されるが、標高の高い方から面の番号付けがされている。

表Ⅱ. 常願寺川の河岸段丘 文献 24)より抜粋

	常願寺川左岸	常願寺川右岸
低位段丘面		大森面 (低位 3 面)、岩嶺野面 (低位 2 面)、下段面 (低位 1 面)
中位段丘面	大川寺面 (中位 3 面、標高約 190m～200m)、上野面 (中位 1 面、標高約 230m)	上段面 (中位 2 面、約 220m)
高位段丘面		瀬戸公園

さて富山国際大学のある東黒牧周辺はどうであろうか。文献 25)では、富山国際大学のある段丘の上側の地質は、中位段丘面のものとされる。そして熊野川から東黒牧の西の段丘辺縁部にかけて取り巻くように呉羽山礫層があるとされる。ここに呉羽山礫層は、70 万年前に形成されたとされ、富山県東部では段丘面の下にある地層である。つまり、富山国際大学のあるあたりの地層は、15～5 万年前に形成された中位段丘面ということになる。津毛城跡の地層は、呉羽山礫層（またはその東で現れる中位段丘面の地層の境界付近）ということになる。

なお、富山国際大学の西方、黒川西岸の大山カメラゴルフ場付近では、文献 21)では河岸段丘の地層が現れていない。河岸段丘の地層は、さらに西へ行った大沢野地区の寺家あたりから、神通川沿いの河岸段丘の地層が現れる。このことから、富山国際大学のある東黒牧は、常願寺川ないし熊野川沿いの河岸段丘の、西端であるといえよう。

6. おわりに

身近な地域の例として、富山市東黒牧を例にとり、興味が持たれそうな歴史や風土を述べてきた。この過程で、富山市東黒牧は小地域であるが、小地域は小地域なりの興味のもたれる素材があることが明らかとなった。津毛城跡及び近隣の城跡、津毛城と関係する街道、津毛城築城者といわれる桃井直常及びその墓や遺物、黒牧彦伝説などであり、それについて述べてきたとおりである。長棟往来の富山市布市から富山市牧野あるいは富山市檜木にかけて、ここに記してないものも含めれば、筆者の事前の予想以上に、様々な歴史的遺物や話題があった。小地域である富山市東黒牧周辺がこれらと関わっていたことには、驚かされた次第である。

ただし、歴史的な素材は、記録を捜すのが難しいことは無論のこと、年代の特定や、そもそも伝承の真偽自体が判定の難しいことには困惑した。例えば上杉謙信については、一般的な書籍には武田氏や関東との関係を記した部分が多く、富山県関係では一向一揆が含まれる程度であり、津毛城付近の小地域との関わりを調べることは難しい。持続的な調査が必要と思うに至った次第である。

なお、富山県旧上新川郡大山町では恐竜化石が発見されたが、この話題は含めていない。位置は、ひとつは亀谷付近、それともうひとつあるが、ここは化石が荒らされないように詳細な位置は発表されていないはずである。ただ黒川流域であるとされ、これは長棟往来沿いである。これは、新たに観光資源となる可能性があり、期待される。

ところで、気象現象のスケールでは、マクロスケール/メゾスケール/マイクロスケールと各スケールでの気象現象の把握が必要といわれる。そのような考え方でいえば、全国レベル/県・市町村レベル/居住地（または勤務地）近傍レベルと、各スケールに応じた観光ないしはレクリエーション資源の把握が必要と思われる。全国レベル/県・市町村レベルに偏らないで、居住地近傍レベルでの自然・文化・歴史等の理解が深まる、または少なくとも失われないように努めることが肝要と思われる。このことは、これまで経験したことのない少子高齢化社会を迎えるにあたって、特に危惧していることである。

なお、付録には長棟往来、有峰往来、亀谷往来、飛騨街道について記してある。インターネットでは、長棟往来付近をオートバイでツーリングした人が、写真をホームページに載せていた例があり、奥地の状況を窺うことができた。その他インターネット上の利用として、筆者は、Google Earthで街道沿いの3次元立体画像を表示して、各街道に沿って辿ってみた。街道の高低差を表示してみると、昔歩いた際の難易度とか大変さが想像できたことを付記しておく。

最後に、筆者の浅学非才のため、知らなかったり見落とししたりした史実や、あるいは誤解が、少なからず含まれていないかと危惧している。そのようなことの無いことを期待しているが、仮にそうであったとしても、筆者の浅学非才の為として、ご寛恕願いたいと思う次第である。

7. 付 録

1. 長棟往来などの街道

1.1. 長棟往来（ながとおうらい）

長棟往来は、津毛城の下を通った街道である。またそれ故、富山国際大学に一番近い。この街道は、長棟往来上道（かみみち）ともいう。長棟から飛騨（飛騨市左古地区）に続く道があり飛越の行き来に使われていたが、江戸時代までには神通川沿いの飛騨街道が改良されてきて行き来が盛んになると利用者は減ったという。この道の途中、越中・飛騨国境の長棟峠が「のたうち峠」と呼ばれるくらいきつかったことによると思われる。また雪解けが遅かったという。

長棟鉛山が発見されると、資材や生活用品の運搬が盛んになる。長棟鉛山が廃れると、地元の交通のみとなった。文献(26)、(27)、(28)によると経路は以下のようなものであったろう。長棟峠は、県境の高幡山(1332m)の南西1.5km付近とされる²⁷⁾。

- ① 布市道（富山藩領） 小泉→下堀→上堀→布市→（布市道は青柳新へ続く）
- ② 長棟往来（富山藩領） 布市→富士塚（藤塚）横→上千俵→中布目→西福沢（現富山市上今町）→（熊野川を渡る）
- ③ 長棟往来（加賀藩領、福沢と小坂間は黒川谷沿いである） 東福沢→牧野→日尾（ひお）→馬瀬→石渕→小坂→檜峠→奥山口留番所（おくのやま）→長棟（ながと）

以下では、長棟より先の道について記す。

左古に通じる道を飛騨側では長棟街道といい、越中側では左古道（さこみち）と呼んだ³⁰⁾。

- ④ 左古道 長棟(越中・加賀藩)→長棟峠(越中・飛騨国境、1140m)→左古地区(岐阜県飛騨市)→跡津川→土（ど：岐阜県飛騨市）→越中東街道

なお、次のような茂住峠(もずみとうげ)を経由する道もあった。この道を経由する場合、富山からは飛騨街道から越中東街道を進み、飛騨の杉山から茂住峠越えて長棟へ至ることになるが、こ

の道は長棟往来下道と呼ばれたようである²⁹⁾。長棟往来上道と比べ富山まで1里余計かかったといわれるが、起伏は上道よりは少なかったといわれる。

- ⑤ 長棟往来下道 長棟(越中・加賀藩)→茂住峠(もずみとうげ、越中・飛騨国境)→茂住(岐阜県飛騨市)→越中東街道

さらに、文献28)によると、富山市本郷の浮田家とともに山廻り役をつとめた富山市新庄の竹内家所蔵の飛騨国境古地図では、長棟から大多和(おおだわ)地区(岐阜県飛騨市)へ抜ける下の経路もあったようである。

- ⑥ 高山方面 長棟(越中・加賀藩)→大多和地区(岐阜県飛騨市)→跡津川→土(ど：岐阜県飛騨市)→越中東街道

1.2. 有峰往来

有峰往来は、「うれ往来」(うれは、有峰の古い言い方)ともいった。公用の役人は、朝新庄を出発し上滝で昼食し、口留番所のある水須村で一泊し有峰に向かったという。庶民は一日で上滝と有峰間を移動したという。積雪時は途絶えた。

また、有峰往来は、北陸から飛騨経由で鎌倉へ至る鎌倉街道の一部であった。ただし鎌倉街道という呼び方は岐阜県側で使われて富山県側では使われない。また、唐尾峠(からお)経由の道に対して使われた²⁹⁾。加賀藩主も江戸の行き来はこの街道を使ったことがあるとされる(加賀藩としては、バイパスとしてこの街道の維持に関心があったのであろう)。文献14)、26)によれば、経路は以下のとおりである。

- ① 上滝へ至る例(加賀藩内) 新庄→経堂→町村→古寺→西野新→西番→上滝
- ② 有峰往来(加賀藩内) 上滝→新町(あらまち)→岡田→松木→牧→才覚地(さいかち)→水須口留番所→東笠山(1687m)山頂(あるいは東笠山と西笠山(1697m)の間)→祐延→有峰
有峰から大多和へ出る道は、大多和道といわれた³⁰⁾。
- ③ 大多和道 有峰→大多和峠(おおだわとうげ、1307m)(越中・飛騨国境)→大多和地区(岐阜県飛騨市)→跡津川(岐阜県飛騨市)→土(ど：岐阜県飛騨市)→越中東街道→(江戸へは平湯峠方面)

有峰から和佐府へ出る道は、和佐府道といわれた。急坂で空荷の牛なら通れたという³⁰⁾。

- ④ 和佐府道 有峰→唐尾峠(からおとうげ、1602m)(越中・飛騨国境)→和佐府地区(岐阜県飛騨市、通称山之村)→跡津川→土→越中東街道

1.3. 亀谷往来(かめがいおうらい)

亀谷往来は、亀谷銀山が盛んのはころは資材・生活物資の輸送が多かったという。亀谷銀山の衰退で、街道も衰退したようである。才覚地(さいかち)で有峰往来と分岐したらしい。文献26)によると経路は以下である。

- ① 鼬川(いたちがわ)の南側 大泉→本郷→関→中屋→稲野村(ここで立山道と分岐)
- ② 稲野村→(月岡新をかすめるように)→善名村(富山市善名)(ここで三室道と分岐)
- ③ 善名村→桑原→花崎
- ④ 花崎→上野山→荒町→岡田→松木→牧→才覚地→中地山→和田→亀谷

ここに、稲野村の位置は不明である。富山市下番の辺りかと推定される。また、善名村の後、桑原を経由するとあるが、その場合善名→桑原→大浦→花崎であるが、桑原を経由しないと善名→小原屋→花崎となり距離的にかなり近いが、この経路はなかったのであろうか。荒町とは、富山市新町（あらまち）を指すと思われる。

1.4. 飛騨街道

飛騨街道は、飛騨往来ともいった。神通川経由で、越中から飛騨への街道の富山県内の部分に対する名称である。笹津から猪谷への経路は、神通川左岸と右岸の両方あった。なお、富山市近辺から笹津に至るには幾つかの経路がある。また、また飛騨に入ると、高原川沿いを越中東街道といい、宮川沿いを越中西街道といった。文献 6)、15)、30)によると経路は以下である。

なお文献 30)によれば、江戸時代と明治時代は若干経路が異なるなど、時期的な相違はあるようだ。

① 富山藩領 富山市太田口(太田口通りの日枝神社近くの地点) →中野口→中野新町→小泉
笹津までの道は幾つかあるので、例を示す。まず青柳新を経由する例を2つ挙げる。

② 富山藩領 (飛州往来) 小泉→森田→二俣→悪王寺→上熊野→青柳新→(熊野川を渡る)

③ 富山藩領 (布市道) 小泉→下堀→上堀→布市→森田→青柳新→(熊野川を渡る)

④ 加賀藩領 (熊野川を渡る) →小黒→二松→坂本→東笹津

次に青柳新を経由しない例であるが、文献 6)に以下のようなものが記載されている。

⑤ 飛騨往来 中野口→太郎丸→黒崎→新保→押上→岩木→東笹津

⑥ 飛騨往来新道(江戸時代末期) 中野口→最勝寺→下熊野→大久保→東笹津

笹津から南は、神通川右岸・左岸に分けて説明する。

⑦ 飛騨街道東道(神通川右岸、加賀藩領) 東笹津→牛ヶ増(うしがませ)→芦生→今生津→布尻
→町長→寺津(長棟川を渡る)→吉野→伏木→舟渡→東猪谷→(高原川沿いの越中東街道)
→横山(以後岐阜県飛騨市)→杉山(長棟鉦山への分岐点)→茂住→跡津川落合

富山藩成立以前は飛騨街道東道が盛んであったが、富山藩成立以後は、例えば富山市五福方面から八尾を経て飛騨街道西道に入る道等があったため、飛騨街道東道よりも盛んになったといわれる。なお、国道41号線は、富山県側の笹津から蟹寺までは、飛騨街道西道を元にしてしているとされる。

⑧ 飛騨街道西道(神通川左岸、富山藩領) 笹津→岩稲→楡原→庵谷→片掛→猪谷→蟹寺→(宮川沿いの越中西街道) →西加賀沢(富山藩)→小豆沢(岐阜県飛騨市)

2. 上杉謙信自らの越中への出陣

文献 14)、31)、32)、33)、34)、35)からは、上杉謙信自らが越中へ出陣したのは、以下のとおりと思われる。なお、元亀元・2年と天正5・6年については、文献 36)も参考にした。

なお下の表中、上杉謙信作といわれる和歌「武士(もののふ)の鎧・・・」(魚津城跡とされる富山県魚津市大町小学校の庭に歌碑がある³⁷⁾)については、その成立を文献 37)では天正元年を採用し、文献 38)では天正5年閏7月7日を採用している。ここでは文献 38)の記載に従った。

表Ⅲ. 上杉謙信自らの越中へ出陣

元号	年(西暦)	出来事
享祿	3年 (1530)	1月21日越後守護代長尾為景の末子として、春日山城で誕生。
永祿	3年 (1560)	3月26日初めて越中に出陣、椎名康胤(松倉城)を援け3月30日神保長職(富山城)を討ち、神保長職は増山城(砺波市増山)へ移る。(4月中旬帰国)
永祿	5年 (1562)	7月越中に出陣、神保長職を破る。9月再度越中に出陣、神保長職を増山城追い込むが、畠山義綱の調停で講和。(10月16日越後へ引き上げる)
永祿	11年 (1568)	3月越中に出陣。椎名康胤が背き松倉城を攻め、放生津に営陣し、守山城も攻める。本庄城主(村上城主)本庄繁長謀叛の報を受け、3月25日放生津の陣を引き払って、帰国。
永祿	12年 (1569)	8月20日境川を越え、8月22日武田側へ寝返った椎名康胤を松倉城の支城の金山城に攻め、魚津城将を河田長親とする。越中滞在80日(10月27日春日山戻る)。
元龜	元年 (1570)	元龜元年は、上杉謙信自身の越中出陣はなかったと思われる。 (以下は、上杉謙信の動向。 3月北条氏康の子氏秀を養子に迎え、柿崎景家の子晴家を人質に小田原城へ送ることにする。4月12日沼田城で氏秀と対面し、春日山城へ帰り、4月25日謙信の幼名「景虎」名乗らせる。10月20日上杉謙信は上野へ出陣(衝突もなく12月に帰国)。12月13日春日山城看経所に越中平定祈願文を納める(署名を「謙信」とする。)
元龜	2年 (1571)	(2月越中派兵するがすぐ撤退) 3月上旬、越中へ出陣し、椎名康胤の富山城をはじめ十数城を攻略、ただし守山城、湯山城(氷見市森寺)の攻撃は小矢部川増水のため取り止める。
元龜	3年 (1572)	一向一揆側が日の宮城(射水市宇日の宮)、呉福山(富山市呉羽山)で勝ち勢い付く中、8月6日越中に出陣8月18日、越中新庄城に入り富山城を攻撃一向宗徒と戦う。9月18日富崎城(別名滝山城、富山市婦中町富崎)の攻撃を開始し、9月23日攻略する。10月富山城を攻略。越中で越年。
元龜 天正	4年 元年 (1573)	1月一向一揆と和睦、松倉城主椎名康胤を赦免。帰国途中3月5日椎名康胤が再び背き、引き返して富山城を攻撃、稲荷・岩瀬・本郷・二宮・押上を築城し、越中の富山城以外の神通川以東を制圧。(4月21日春日山城に戻る)。7月越中に出陣、椎名康胤、神保長職を討ち、越中平定(8月朝日山城(金沢市加賀朝日町)を攻略。北条氏上野進出のため8月21日帰国)。
天正	4年 (1576)	(北越軍談によると) 7月下旬に魚津城に着陣後、飛騨江間氏を攻める。8月末越中に出陣し、9月初め梅尾城(富山大沢野)と増山城(砺波市増山)を攻略、飛騨口に二城を築き、湯山城を包囲。(11月一向一揆内での対立が発生したが、これは本願寺側が処理。12月七尾城を包囲)

表Ⅲ. 上杉謙信自らの越中へ出陣 (続き)

元号	年(西暦)	出来事
天正	5年 (1577)	(1月18日木落口で七尾城兵と戦う。2月七尾城攻略準備するが、3月下旬帰国し関東出陣準備。) 能登の戦況悪化のため、閏7月初め魚津に出陣し江馬輝盛に織田信長警戒を指示した。(その後、七尾城を攻撃。9月七尾城、末森城攻略、9月28日湊川(手取川)の戦で織田軍破る。) (武家百人一首(同名3種の本中、明治42年富田良穂撰の本 ³⁹⁾)に含まれ、上杉謙信がこの年の秋、魚津城で詠んだとされる、「武士(もののふ)の鎧の袖をかたしきて 枕に近き初雁(はつかり)の声」という短歌があるが、閏7月初め魚津城に出陣した際のことといわれる ³⁸⁾ 。)
天正	6年 (1578)	3月9日倒れ、3月13日春日山城で死去。享年49歳。

3. 太平記中各章段に現れる桃井関係人名とその出現回数

文献40)には、太平記全文のテキストがデジタルデータで含まれる。桃井関係の人名の出現の様子を調べるため、それに対して簡便な字句解析プログラムを作成して、太平記に含まれる名前の種類と出現頻度を測定した。

下の表Ⅳに、桃井関係の人名とその出現回数を、太平記の各巻の章段毎にまとめた。「桃井」としか記されていない場合は「桃井」とした。「桃井播磨守直常」・「桃井直常」・「桃井播磨守」・「直常」などは、全て区別して回数を数えた。人名の後の括弧付き数字は出現回数である。数字のないものは1回のみ出現した。

章段の見出しは、文献40)に従った。文献19)~22)の書き方とはやや異なり、例えば「付けたり」と書かずに単に「付」とのみ書いてある。

なお、「桃井」であるが、文献20)によると「巻19 奥州国司頭家卿並新田徳寿丸上洛事巻」で初めて桃井直常が登場するとされるので、それより前の「桃井」は桃井直常を指していないと思われる。即ち桃井一族は有力武将を輩出した家柄であり、桃井一族の他の者を指していると思われる。それ以降に現れる「桃井」で桃井直常を指すと思われるものについては、表中に理由を記して指摘してある。

表Ⅳ. 太平記における桃井関係人名と出現回数

巻 章段	桃井関係人名、2回以上の場合括弧内に回数
巻第10 新田義貞謀叛事付天狗催越後勢事	桃井次郎尚義
巻第10 鎌倉合戦事	桃井
巻第10 稲村崎成干瀉事	桃井
巻第10 大仏貞直並金沢貞将討死事	桃井

表Ⅳ. 太平記における桃井関係人名と出現回数 (続き)

巻 章段	桃井関係人名、2回以上の場合括弧内に回数
巻第14 節度使下向事	桃井遠江守 桃井修理亮義盛 (桃井遠江守は、桃井遠江守有常と思われる)
巻第14 矢矧、鷺坂、手超河原闘事	桃井
巻第14 将軍御進発大渡・山崎等合戦事	桃井修理亮義盛 桃井
巻第16 聖主又臨幸山門事	桃井兵庫助顕氏
巻第17 山攻事付日吉神託事	桃井
巻第17 義貞北国落事	桃井駿河守義繁
巻第19 奥州国司顕家卿並新田徳寿丸上洛事	桃井播磨守
巻第19 追奥勢跡道々合戦事	桃井播磨守直常 桃井(2)
巻第19 青野原軍事付囊沙背水事	桃井播磨守 桃井播磨守直常 桃井直常 直信・直常兄弟 直信・直常(2) 桃井兄弟(5) 桃井(3) 桃井塚
巻第20 義貞馬属強事	桃井
巻第21 先帝崩御事	桃井
巻第21 塩冶判官讒死事	桃井播磨守直常 直常 桃井
巻第27 御所困事	桃井修理亮義盛
巻第29 宮方京攻事	桃井右馬権頭直常 直常(2) 桃井(3)
巻第29 将軍上洛事付阿保秋山河原軍事	桃井(14) (京都攻防の事で直常を指すようだ。弟の直信・直弘も含む可能性はある)
巻第29 将軍親子御退失事付井原石窟事	桃井(3) (京都攻防の事で直常を指すようだ)
巻第30 将軍御兄弟和睦事付天狗勢汰事	桃井 (文献21) 注に直常を指すとある)
巻第30 高倉殿京都退去事付殷紂王事	桃井右馬権頭直常
巻第30 直義追罰宣旨御使事付鴨社鳴動事	桃井(3) (文献21) 注に直常を指すとある)
巻第30 薩多山合戦事	桃井播磨守直常 桃井播磨守 桃井(3)
巻第31 南帝八幡御退失事	桃井播磨守直常(2)
巻第32 直冬上洛事付鬼丸鬼切事	桃井播磨守直常 桃井播磨守 桃井
巻第32 神南合戦事	桃井播磨守直常
巻第33 京軍事	桃井播磨守直常(2) 桃井播磨守(2) 直常 桃井(3) 苦桃(桃井直信のこと)
巻第33 八幡御託宣事	桃井 (文献22) 注に直常を指すとある)

表Ⅳ. 太平記における桃井関係人名と出現回数 (続き)

巻 章段	桃井関係人名、2回以上の場合括弧内に回数
巻第 33 三上皇自芳野御出事	桃井播磨守直常
巻第 33 菊池合戦事	桃井左京亮 桃井右京亮
巻第 37 南方官軍落都事	桃井(「越中の桃井」とあり直常等を指すようだ)
巻第 38 諸国官方蜂起事付越中軍事	桃井播磨守直常 直常 桃井(8)
巻第 39 諸大名讒道朝事付道誉大原野花会事	桃井播磨守直常

4. 桃井直常の年表補足太平記にみる役割

4.1. 桃井直常の年表補足と太平記にみる役割

桃井直常の年表は文献 6)などに見られる。ここでは、桃井直常の名前が出現する太平記の章段を中心に、桃井直常の年表を補足する。

下で◎印があるものは、太平記の章段が文末の括弧内に示してある。本文中「表Ⅰ. 太平記中、桃井直常(弟の直信・直弘含む)の記述がある巻と章段」や付録 3 の「表Ⅳ. 太平記における桃井関係人名と出現回数」にある太平記の章段の時期と桃井勢に関係した内容を中心に記してある(19) 20) 21) 22)。太平記の内容については、後に述べる巻第 38 諸国官方蜂起の事 付けたり越中軍の事」以外は、史実か否かは検討していない。

なお、○印があるものは、太平記の章段とは無関係であるが、桃井直常の動静や時代背景に関するものである。

◎建武 4 年 (1337) 8 月北畠顕家等上洛を目指して進軍し、12 月利根川の合戦で足利義詮軍を破る。鎌倉では足利義詮のもと桃井直常らの武将は鎌倉からの一時退却を考える。観応の擾乱以前、直常は足利尊氏派(太平記巻第 19 奥州の国司顕家卿ならびに新田徳寿丸上洛の事)。

◎建武 4 年 (1337) 12 月 北畠顕家等、鎌倉を攻める。足利義詮が合戦を決断し戦うが負け、桃井直常を含む鎌倉守備の武将等は退却し、体制を立て直して京へ向かう北畠顕家等を追う(太平記巻第 19 奥勢の跡を追うて道々合戦の事)。

◎暦応元年 (1338)1 月 美濃・青野原の戦いで桃井直常は北畠顕家に敗れるが、2 月に奈良から京を攻めようとする北畠顕家軍数万を、桃井直常・直信兄弟は兵力 700 で奈良・般若坂(現奈良坂)で阻止し大勝する(太平記巻第 19 青野原軍の事)。

◎暦応 4 年 (1338)3 月 高師直の讒言で塩治判官(佐々木高貞)が京落ち、山名時氏・桃井直常・太平出雲守が追討し、塩治判官は出雲で自害(太平記巻第 21 塩治判官讒死の事)。

○康永 3 年(1344) 桃井直常、越中の守護となる(観応 2 年(1351)まで)。

◎観応 2 年(1351)1 月 15 日 足利義詮京を脱出、桃井直常入京する。この頃の直常は足利直義派(太平記巻第 29 官方京攻めの事)。

◎観応 2 年(1351)1 月 15 日 將軍側 2 万の軍勢が上洛する。足利尊氏・足利義詮側と桃井直常とが、四条河原で激突する。賀茂川を挟んで対峙し双方模様眺めしていたところ、桃井側秋

山光政が名乗りを上げ將軍側阿保忠実が応じ一騎打ちとなり、両軍勢は戦いを中断し見物。秋山若干有利になったと見た阿保側から矢が放たれ、秋山矢 23 本を打落とす阿保も秋山を庇った。その後本格な戦いになり、仁木・細川一万余と桃井 7 千とが戦い、更に佐々木道誉 7 百が桃井の背後をつき、桃井勢は 2 手に分かれて応戦する。夕方將軍と近衛 5 千が加わり東山を越えようとする桃井を牽制。桃井は夜になって逢坂山(関山)に引く(太平記巻第 29 將軍上洛の事)。

- ◎観応 2 年(1351) 1 月 16 日 將軍側は桃井側に勝利したつもりでいたが、夜になり多数の脱落者が発生し、足利尊氏、足利義詮、京を落ちる(太平記巻第 29 將軍親子御退失の事)。
- ◎観応 2 年(1351) 3 月 將軍足利尊氏と足利直義が相談、直義が義詮を補佐することで合意。直義側の石塔・上杉・桃井、尊氏側の仁木、細川、土岐、佐々木は合意に納得するかと太平記では記される(太平記巻第 30 將軍御兄弟和睦の事 付けたり天狗勢汰への事)。
- ◎観応 2 年(1351) 7 月 足利義直は、石塔義房、桃井直常に説得されて、京を逃れ、敦賀へ落ちる(太平記巻第 29 高倉殿京都退去の事 付けたり殷の紂王の事)。
- ◎観応 2 年(1351) 7 月 近江の八相山で、足利尊氏軍と足利義直軍(義直側大将は石塔義房、畠山国清、桃井直常)が戦い、足利直義軍越前へ退却。桃井直常の説得で越前から鎌倉へ向かう(太平記巻第 30 高倉殿京都退去の事 直義追罰の宣旨御使ひの事 付けたり鴨の社鳴動の事)。
- ◎観応 2 年(1351) 12 月 薩埵山(静岡県清水市薩埵峠)に陣取る足利尊氏の援軍の宇都宮勢が、進軍中追尾してきた桃井直常を破る。最終的に足利直義軍は負ける(太平記巻第 30 薩埵山合戦の事)。
- 観応 3 年(1352) 2 月 26 日 鎌倉に幽閉されていた足利直義亡くなる。
- ◎観応 3 年(1352) 5 月 11 日 八幡合戦が 3 月 15 日より続き、後村上天皇が八幡から吉野へ落ち延びた。このため、後村上天皇の招集に呼応し、桃井直常ら越中・越後勢 1 万など、続々八幡に向かっていった兵力は、引き返してしまった(太平記巻第 31 南帝八幡御退失の事)。
- ◎文和 4 年(1355) 1 月 13 日 足利直冬上洛。桃井直常、斯波高経(道朝)も上洛。足利尊氏は滋賀県へ退却(太平記巻第 32 直冬上洛の事)。この頃の直常は足利直冬派。
- ◎文和 4 年(1355) 2 月 8 日 細川相模守清氏が京都・四条大宮で北陸勢と終日戦ったが、夕刻二宮兵庫助が桃井直常を名乗り、細川清氏と一騎打ちをしての桃井直常の身代わりで討死する。2 月 15 日の朝は、桃井直信(直常の弟)・尾張左衛門佐等 5 百と細川清氏・佐々木黒田判官等 7 百が六条河原その他で戦い、夕方は桃井直常・赤松等 2 千が仁木・土岐等 3 千と七条河原などで戦い、押されて足利直冬のいる東寺へ退却するが、追ってきた敵は七条河原に退却させた。將軍側と南朝側の戦いは 3 月半ばまで続くがやがて將軍側が優勢となり、足利直冬側が京から河内の方へ退却する(太平記巻第 33 京軍の事)。
- ◎文和 4 年(1355) 3 月の敗戦後、足利直冬側の兵力は数万あったが、足利直冬は更に合戦を通続ける決断を下せず、諸国の兵は解散していった。東寺の石塔や桃井直常などの落書きから足利直冬側の求心力の衰えが窺える(太平記巻第 33 八幡御託宣の事)。
- ◎延文 2 年(1357) 足利直冬、桃井直常等が神南などで負け、都が静かになったので、崇光・光厳・光明各上皇は吉野から京都に帰る(太平記巻第 33 三上皇芳野より御出での事)。

- 延文3年(1358) 足利尊氏亡くなる。
- ◎康安元年(1361)12月 (細川清氏の進言で南朝後村上天皇が決断し南朝側が京に攻め入り、将軍足利義詮が京落ちした後のこと、)南朝方は桃井直常など諸武将が来ないなど予想外に兵力が集まらず、将軍側は兵力集まってきたため、南朝方が京を落ち、将軍が京に入る(太平記巻第37 南方の官軍都を落つる事)。
- 貞治元(1362)1月23日 足利義詮は桃井直和(直常の子)討伐を、能登の吉見氏頼などに下知した。
- 貞治元年(1362) 斯波義将(当時13歳)は、佐々木道誉の推薦で足利幕府執事になる。斯波高経が後見人となり実権握る。
- 貞治元年(1362) 斯波高経、越前守護の他、越中守護となる。
- 貞治2年(1363) 高経の子斯波義将、越中守護となる(貞治5年(1366)まで)。
- ◎貞治5年(1366)8月 足利義詮、斯波高経(道朝)討伐を凶り、斯波高経(道朝)は越前へ逃避する。貞治6年(1367)7月、斯波(道朝)、越前にて病没する。高経の子斯波義将が将軍の赦免を得て、9月4日には上洛する。程なく桃井直常討伐を了承しその功績があったので、応安元年(1368)斯波義将が越中守護となる(太平記巻第39 諸大名、道朝を讒する事)。
 - ※ なお、斯波義将の越中守護は康暦元年(1379)までで、康暦元年からは任地変更で越前守護に、逆に越前の畠山基国が越中守護となる。義将は康暦元年からは管領職でもあり、生涯5度室町幕府の管領職を務めたといわれる。斯波高経は楠正成、新田義貞に勝利した。これ頃より後、斯波高経といい斯波義将といい、桃井直常には強敵が立ちはだかることになる。
- 応安元年(1368)2月24日 桃井直常・直信・直和ら桃井一党は越中に帰るとい³³⁾。
- 応安2年(1369)10月～年末 越中守護・斯波義将と能登の吉見氏頼は、桃井勢討伐のため越中松倉城を攻略、桃井直常が退却したらしい(得田文書)。
- 応安3年(1370) 直常の子桃井直和が松倉城を出て長沢城にこもる(3月5日)。守護斯波義将と桃井中直和は長沢で戦い直和が討死(3月16日)。桃井直常は飛騨へ落ち延びたとされる。
- 応安4年(1371)7月28日 桃井勢と能登勢が五位荘で戦うとい³³⁾。
- 明德3年(1392)閏10月5日 南北朝統一される。

4.2. 太平記「巻第38 諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事」について

4.2.1. 太平記の内容

「巻第38 諸国宮方蜂起の事 付けたり越中軍の事」の内容は、桃井直常に関しては以下の様なものである。

越中では桃井播磨守直常が、信濃から越中に入り、国人を集め加賀を攻めようとするが、機先を制して能登・加賀・越前勢が越中に攻め入り3陣を作る。桃井は、越前勢を破り、能登・越中勢も散り散りにし日暮れに本陣へ戻った。夜半、評定事をしようとして2里離れた井口城へ誰にも告げずに出かけた。直常不在を知った兵達が大將が逃げたとお騒ぎをし、次々に脱出し、混乱し火事になった。その火事を見た桃井直常は、井口城へ入ってこもった。

4.2.2. 対応する出来事の検討

前の章段「巻第 38 彗星客星事付湖水乾事」は彗星と超新星(もしくは新星)の現れた康安 2 年(1362)の話で、次の章段「巻第 38 九州探題下向事付李將軍陣中禁女事」は斯波氏経の九州探題下向と出家の話で康安元年(1361)から貞治 6 年(1367)のことであるから、「巻第 38 諸国官方蜂起の事 付けたり越中軍の事」もこの時期のことであろう。この時期に適合する越中での出来事は以下のとおりである。

貞治元年(1362) 1 月 23 日の、足利義詮の吉見氏頼ら能登武士団への桃井直和追討の下知に呼応し、吉見氏頼ら能登勢が桃井勢と戦った。しかし、太平記では越中国内で戦いがあったとしており、貞治元年の能登の吉見氏頼らの戦いとは主に能登・加賀であったことから、違うと思われる。

であれば、越中守護斯波高経が二宮円阿に桃井直常討伐させたことを指している可能性があると思われる。太平記本文中、桃井直常が 2 里離れた井口城へ行くことになっているが、これは野尻城(南砺市野尻(旧福野町))から井口城(南砺市池尻(旧井口村))まで 2 里程度であり、桃井直常の本陣が野尻城付近にあって井口城へ出かけるとすると符号するのである。

よって、「巻第 38 諸国官方蜂起の事 付けたり越中軍の事」の桃井直常に関する内容に対応する出来事は、以下の様なものであらうと、今のところ推測している次第である。

- 貞治元年(1362) 2 月 9 日 足利義詮が桃井直常を討伐するよう、二宮円阿(二宮次郎左衛門入道、二宮貞光と記されることもある)に命じる³⁴⁾。
- 貞治元年(1362) 2 月 10 日 斯波高経が桃井直常を討伐の軍を差し向けるよう、二宮円阿(二宮次郎左衛門入道、二宮貞光と記されることもある)に命じる³³⁾。
- 貞治元年(1362 年) 7 月、二宮円阿は庄城(別名、庄の城、壇の城。砺波市庄川町庄、市指定史跡)・野尻城(南砺市野尻(旧福野町)、城址は徳仁寺)・鴨城(高岡市福岡町加茂。高岡市史跡)・頭高城(不明)などに転戦し、桃井勢と戦う^{33) 34)41)}。
- 貞治 2 年(1363) 6 月 二宮円阿が、昨年 2 月以来の砺波・射水における軍功を具申し、その後証判を受ける(二宮円阿軍忠状、二宮文書)^{33) 34)}。

8. 参考文献

- 1) 財団法人日本交通公社、原重一、林清、寺崎竜雄、久保田美穂子編：『美しき日本』、財団法人日本交通公社発行(1999 年 8 月)
- 2) 富山県埋蔵文化センター編：『大山区都市建設に係る埋蔵文化財試掘調査報告 東黒牧上野遺跡 東福沢遺跡』、富山県大山町教育委員会発行(1989 年 3 月)
- 3) 富山県埋蔵文化センター編：『富山県大山町 東黒牧上野遺跡 A 地区 発掘調査概要』、富山県大山町教育委員会発行(1990 年 3 月)
- 4) 富山県埋蔵文化センター編：『町道東黒牧上野山線改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告 東黒牧上野遺跡 A 地区』、富山県大山町教育委員会発行(1995 年 3 月)
- 5) 富山県大山町教育委員会編：『富山県大山町 東黒牧上野遺跡 G 地区 発掘調査概要』、富山県大山町教育委員会発行(2000 年 3 月)
- 6) 大山町史編纂委員会編：『大山町史』、富山県上新川郡大山町役場発行(1964 年 10 月)

- 7) 富山県埋蔵文化センター編：『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』、富山県埋蔵文化センター発行（2006年3月）
- 8) 平凡社地方資料センター編：『日本歴史地名体系第16巻 富山県の地名』、平凡社(1994年7月)
- 9) 塩照夫：『越中の古城』、北国出版社(1972年2月)
- 10) 堀宗夫：『塩屋・江馬と飛越の物流』、北陸の中世城郭、第6号（1996年6月）
- 11) 野崎雅明著、富山県郷土史会校注：『肯構泉達録』、KNB興産（1974年11月）
- 12) 富田景周：『越登賀三州志』、石川県図書館協会(1933年12月)
- 13) 角川日本地名大辞典編集委員会編：『角川日本地名大辞典 富山県』、角川書店（1979年1月）
- 14) 深井甚三、本郷真紹、久保尚文、市川文彦著：『富山県の歴史』、山川出版社（1997年8月）
- 15) 大沢野町誌史編纂委員会編：『大沢野町誌 上巻』、富山県上新川郡大沢野町役場発行（1958年3月）
- 16) 多賀秋五郎：『改訂 飛騨の研究 下巻』、濃飛文化協会(1978年5月)
- 17) 高岡徹：『戦国期上杉城の復原研究 一越中今泉城をめぐる戦国史一』、富山市日本海文化研究所紀要、第6号、pp.1-21、富山市日本海文化研究所発行（1993年3月）
- 18) 石原与作著、大山町史編纂委員会編：『大山史話』、富山県上新川郡大山町役場発行（1963年2月）
- 19) 山下宏明校注：『太平記 二』(巻第9～巻第15)、新潮社（1980年5月）
- 20) 山下宏明校注：『太平記 三』(巻第16～巻第22)、新潮社（1983年4月）
- 21) 山下宏明校注：『太平記 四』(巻第23～巻第31)、新潮社（1985年12月）
- 22) 山下宏明校注：『太平記 五』(巻第32～巻第40)、新潮社（1988年12月）
- 23) 富山市史編さん委員会編：『富山市史 通史 上巻』、富山市発行（1987年1月）
- 24) 藤井昭二：『大地の記憶 一富山の自然史』、桂書房（2000年2月）
- 25) 藤井昭二他編図：『10万分の1富山県地質図説明書』、内外地図株式会社（1992年3月）
- 26) 大山町の歴史編集委員会編：『大山町の歴史』、富山県上新川郡大山町役場発行（1990年3月）
- 27) 田井外志雄：『長棟峠』、URL：
<http://www.takayama-nh.go.jp/touge/059/body.htm>(2006年10月現在)
- 28) 塩照夫編：『続 新庄町史』、富山市新庄校下自治振興会発行（1991年3月）
- 29) 塩照夫：『富山県歴史の五街道』、ヨシダ印刷株式会社（印刷所）(2002年4月)
- 30) 富山県教育委員会編：『富山県歴史の道調査報告書 一飛騨街道（その1）一』、富山県教育委員会発行(1979年3月)
- 31) 池享、矢田俊文編：『上杉氏年表 為影 謙信 景勝』、高志書院(2003年9月)
- 32) 矢田俊文：『上杉謙信 一政虎一世中忘失すべからず候一』、ミネルバエ書房(2005年12月)
- 33) 富山県編：『富山県史 史料編 年表』、富山県発行(1987年3月)
- 34) 富山県編：『富山県史 史料編2 中世』、富山県発行(1975年12月)
- 35) 富山県編：『富山県史 通史編2 中世』、富山県発行(1984年3月)
- 36) 米沢温故会編：『上杉家御年譜 第一巻』、原書房(1988年12月)
- 37) 森清松：『富山の文学碑』、北国新聞社(1990年1月)

- 38) 廣瀬誠：『越中の文学と風土』、桂書房(1998年1月)
- 39) 伊藤嘉夫：『武家百人一首と其の類列の百人一首』、跡見学園短期大学紀要，第7/8集，51-84(1971年3月)
- 40) 荒山慶一入力：『HTMLファイル（読み仮名省略。国民文庫本（太平記、明治42年8月発行）・全巻）』、<http://www.j-texts.com/taihei/thkm2.html>（2007年11月現在）
- 41) 福野町史編纂委員会：『福野町史 通史編』、富山県東砺波郡福野町役場(1991年12月)

